



特別寄稿

工学をしている人から見た数学者のイメージ

自然科学科 中川英則

特別寄稿を新任教員に書いて欲しいと頼まれ、はどうしようかと困ってしまいました。専門書は別として、正直、私は本をあまり読まない。最近では、忙しさにかまけてなお更、本を読んでいない気がする。寄稿を書くため、高校時代や学部時代に読んだ本で、特に印象に残っているものはないか思い返してみました。そんな中、学部時代に先輩から薦められた一冊の本を思い出した。藤原正彦著の『数学者の言葉では』という新潮社から出ている本である。藤原正彦といえば、作家・新田次郎と藤原ていの次男であり、数学者である。作家としても著名で、アメリカ留学記『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイストクラブ賞を受賞している。

何故、この本を思い出したかというところ、「数学者に対する自分が今まで抱いてきたイメージを覆してくれた本」という印象を学部時代に持っていたからである。それまで、土木工学科で応用力学を学んできた私にとって、数学を専門にする人のイメージは、自分には想像もつかない頭脳の持ち主であって一風変わっている人、であった。しかし、この本は、これまで出会った学生への思い、旅の思い出、新婚旅行でのエピソードなど、普通の人々が日常生活の中で感じる話で構成されていて、「数学者も一人の人間なんだな」と、初めて数学者に対して共感が持てたような思いがあったのだ。

些か本の内容も忘れかけていたので、先日、校内の図書館に足を運んで『数学者の言葉では』を借りてみた。ついでに、数冊の文庫本や新書も借りた。藤原正彦著の『遥かなるケンブリッジ』、秋山仁著の『数学流生き方の再発見』、森毅著の『数学で何を学ぶか』、志賀浩二著の『無限への一步』である。

藤原正彦著の2冊を読返してみても思った。「こんな内容だったかな？」。そう、昔に読んで頭に思い描いていた印象と、今読んでみて感じる印象とがまるで違うのだ。それまでは、数学者に対して自分が持つイメージを一掃してくれた、『数学者の言葉では』の内容のみが強く頭に残っていた。そして、読んだうちのもう一冊である『遥かなるケンブリッジ』の内容を然程気にも留めていなかった。だが、『遥かなるケンブリッジ』を再度読んでみて、その内容に正直へこんでしまった。最先端で活躍する数学者は、天才と呼べる人間ばかりのような気がした。

秋山仁著『数学流生き方の再発見』の「数学に生きる人々」という章を読んでさらにへこんだ。様々な個性の数学者が書かれているが、皆、天才。数学だけが得意かといえば、スキーなどのスポーツでも一流の腕並み。大道芸をサイドワークとする人さえいる。集中力に関しても、学会で質問された難問を、構内のベンチに座って夕暮れまで考えて、ついに定理を作ってしまったなど、常人の域を遥かに超えているような気がした。そして思った。数学を専門にしていなくてよかった…。まあ、そんなことを思わずとも、数学を専門にするなど、私にはとんで無理な話ではあるのだが。

再び、数学者のイメージが、自分には想像もつかない頭脳の持ち主であって一風変わっている人、となってしまった。志賀浩二著の『無限への一步』とA.W. Moore著の『無限』を読みながら、「数学は確かに面白いな。でも、絶対に自分とは違う世界の人間だな。」と、自然科学科で数学を教えているにも関わらず、ふと呟いてしまった。

(時計台ともみの木が見える教員室にて)